

21世紀の生のための

キーワード

——新しい批評のことば——

河野真太郎 大貫隆史
Kono Shintaro Onuki Takashi

コミュニティ

■ 共同体とコミュニティ

コミュニティ、これもまた、初回に述べたカタカナ語の困難をともなう言葉である。「コミュニティ」と言った場合と「共同体」と言った場合の響きの違いはなにしろ圧倒的だ。直感的には、「共同体」には、何かじめじめした、束縛や義務をともなうものが感じられるかもしれない。それに対する「コミュニティ」には、より生き生きとして軽やかで、先進的で、「よい」響きがある。いずれも人と人とのつながりを指す言葉だが、前者にはそのつながりの「負」の側面が、後者には「正」の側面が、凝縮されている。

じっさい、現在使われている日本語のなかで、「共同体」と「コミュニティ」は交換可能ではない。新聞などに出てくるこ

これらの言葉の用法を考えてみればよい。たとえば、「東アジア共同体」という構想がある。これはおそらく EC (European Community) を発想のみなもとにしているのだろうが、「東アジア・コミュニティ」とは呼ばれない(そこには、EC を「欧州共同体」と訳してきたという以上の事情がありそうだ)。また、これはちょっとした実験であるが、「コミュニティの伝統」、はたまた「山口県徳地町¹の村落コミュニティ」という言いかたには、何か抵抗を感じないだろうか。いずれも、「共同体」のほうがしっくりくるかもしれない。さらに、これは現在使われている言葉だが、「コミュニティ・センター」が何を指しているか、具体的に頭に浮かぶだろうか。「公民館」と言ったほうが、はるかにわかりやすいかもしれない。かたや、最近よく耳にする「コミュニティ再興」について、「共同体の再興」という言いかたをすることはまずない。また、インターネットのコミュニティ・サイトを「共同体サイト」と呼べば、何か別のものを指しているように聞こえる。

とはいえ、この二つの言葉が、無関係な別の言葉であるはずもない。ではなぜ、このような区分が生まれてきたのだろうか。この区分は、私たちの現在について何かを語ってはいないか。そのことを、今回は「コミュニティ」に焦点を当てることで考えてみよう。

¹ 山口県中部にあった町。2005年にいわゆる「平成の大合併」の一環で隣接する山口市に吸収された。総面積の9割が山林で、主な産業は林業と稲作であった。合併時の人口は8千人弱。

■ 訳語としての共同体・コミュニティ

さて、前回は、コミュニケーションというキーワードから、コミュニティという言葉の重要性へとたどりついたのだが、これらが同系統の言葉であることを確認しておこう。そのためには、日本語としてのコミュニティ/コミュニケーションにとどまらずに、その原語(とりあえずは英語)における関係を知っておくことは無駄ではあるまい。Communityの類語には、commune(聖餐式を受ける・原始的共同体)、communion(聖餐式)があり、この言葉は中期フランス語のcomuner(共有する)から来ている。そこから発する類語には、communication, common(共有の・普通の)、communism(共産主義・コミュニズム)がある。いずれも、「共有すること、もしくは何かを共有した人間の集団」という意味が、この語群にはあるのだ。

さらに、この語源的な関係から生じてくる、コミュニティの重要な二側面を指摘しておこう。すなわち、「生産」と「消費」の主体としてのコミュニティである。一方で、共同体は、個人では不可能であるような生産を可能にするものである。自然に手を加え、天然資源を開発し、それを消費可能な製品とする。そのための共同体である。一方で、communityという語に関連するcommunionは、キリスト教の文脈(聖餐式)ではパンとぶどう酒を共に飲み食いする=消費する(consume)儀式である。コミュニティは、自然(この場合は神)から与えられたものを消費する集団でもあるのだ。この、生産と使用、または労働と消費の二側面をコミュニティという語はもっているのだが、場合によってはその一方が強調され、他方が隠されるということが起こる。(レイモンド・ウィリアムズ『田舎と都会』第三章「牧歌と反牧歌」を参照。)

語源的な関係以外にも、人間集団ということを考えるならば、**society** (社会) や **state** (国家), **nation** (国民) と、コミュニティとの差異にも目を向けるべきだろう。レイモンド・ウィリアムズは、ドイツの社会学者フェルディナント・テンニースによる有名な区分、ゲマインシャフトとゲゼルシャフトに言及しつつ、コミュニティという言葉が両方の共同体のあり方を包含することもあれば、上記の社会や国家、国民と区別される意味でコミュニティという言葉が使われることもあると指摘している。しかし、とりあえずは、自然的・直接的な共同体であるゲマインシャフトと「共同体」とのつながりが強く、人工的・間接的な共同体のゲゼルシャフトは社会、国家、国民といった語と結びつくと考えてよいだろう。

さて、「共同体」と「コミュニティ」は、以上のような含意をもつ **community** (もしくはドイツ語の **Gemeinde**) の訳語なのだが、前節で述べたような、この二つの言葉の違いは、どこから生じているのだろうか。「共同体」という訳語が定着したのは、それほど昔のことではなく、第二次世界大戦後のことである(『哲学・思想翻訳語事典』)。たとえば、1955年に、大塚久雄は『共同体の基礎理論』で、つぎのように述べている。

この語〔共同体〕はわれわれが通例見聞する範囲でも、さしあたって広狭やや異なった用語法をもっている。一つは「共同体」という語をとくに無階級の原始共同組織……とほぼ同義に考える用語法である。たとえば、階級分化にともなって「共同体」は崩壊した、などという用語例のばあいがある。しかしこの講義では、いま一つはかなり広い用語法によっている。すなわち、……いっそう広く、

その後封建社会の終末にいたるまでの広汎な期間にわたってつぎつぎに継起する生産諸様式……の土台あるいは骨組を形成した「共同組織」**Gemeinwesen** 全般を問題とするのである。

少々理解しにくいだが、この理解しにくさには理由がある。大塚に与えられていた「共同体」の意味とは、資本主義の成立以前の「原始共同組織」だけであった。大塚は、それ以外の共同体を指す言葉をいまだもたず、この本でさまざまな用語を駆使してそれを説明しようとしていたのである。いまだ名前をもたないものを説明しようとするとき、その説明は必然的に「難解」になる。

しかし、現在の私たちはこれを非常に「単純」に説明できるような気がする。一方に、すでに失われた原始的で血縁的なつながりとしての共同体。他方に、現存し、これからも存続すべき地域共同社会としてのコミュニティ。言いかえると、自然としての共同体、人工的なものとしてのコミュニティという区分である。大塚が説明しようとしたことの一部は、この区分だったのではないかと、現代から見れば言うことができる。

しかし、じつのところ、これだけでは、共同体は悪いもの、コミュニティはよいものであるという意味付けが、どうして生じているのかを説明はできない。(じつさい、大塚自身はそれらがよいものだとも悪いものだとも言っていない。) 血縁のつながりによって守られる自然な共同体はよいものであり、そのような原初的な関係が失われた人工的・機械的なコミュニティは悪いものだと、どうして考えられなくなったのか？

それを解き明かすためには、私たちが「個人」に関してもつ

ている考え方も一緒に考察する必要がありそうだ。つまり、共同体が悪いものだと考えられるとき、その主な理由とは、それが個人の自由をうばうものだからではないのか？ そうだとすれば、逆に、「よいもの」とされるコミュニティは、個人の自由をうばわないけれども共同であることの利益は与えてくれるもの、ということになるはずである。それがよく表れているのが「コミュニティへの参加」という表現である。「共同体への参加」という表現は成立しない。共同体とは個人がそこに生まれ落ちた場所であるのだから、個人の選択で「参加」などできない（したがって「不参加」もできない）。それに対して、コミュニティへの「参加」という表現に違和感がないとすれば、そこには、コミュニティとは自由な個人の選択で参加したりしなかったりできるものだ、という含意があるからだ。

■新自由主義とコミュニティ

ここまで来ると、私たちは大塚久雄が述べた共同体の区分から遠く離れたところに到達している。個人が自分の意思で参加する、人工的コミュニティがよいものだと考えられているとして、そのような価値観はどこから生じたのか？ ここでも焦点が当たるのは、新自由主義である。

新自由主義において、コミュニティはよくも悪くも重要なものになっている。国家と市場と個人という三つの項目の関係を考えてみよう。福祉国家体制においては、市場と個人との間には、国家が介在した。それに対し、新自由主義は、中間にあつて市場の競争から個人を守っていた国家を、退場させようとする。しかし、個人としての私たちは、純粋な市場の競争にさらされつづけることには耐えられない（その痛みを耐えろ、とい

うのが新自由主義の命令だが）。そこで市場と個人の間に入る、「中間的なもの」が、あらたに要請される。

そうした「中間的なもの」とは、たとえば「国民」であるかもしれない。1990年代以降に極端なナショナリズムが見られるようになった一因が、ここにある。その一方で、「コミュニティ」がその中間的なものとして脚光をあびることになる。日本では、コミュニティ再興という課題が、一方では行政区画の変更（平成の大合併、道州制）と、もう一方では「ボランティア」の推奨（学校課程へのボランティア活動の導入）やNGO・NPOによる中間的なものの補充というかたちをとっている。事実、総務省主催の研究会による報告書にはこうある。

……本研究会が行った調査によれば、……特定のテーマを持って活動する地域コミュニティ組織やNPO、商店街、マンション管理組合など、伝統的な地縁による団体以外の様々な主体が、その自主性に基づき、地域の様々なニーズに対応した多様なサービスを提供する主体として重要な役割を果たしている事例が見られたところである。（「新しいコミュニティのあり方に関する研究会報告書」、2009年；傍点は引用者）

コミュニティがNPOのような中間的なものになりうるためには、それは人工的なものとならねばならない。それは「伝統的な地縁による団体」であってはならない。というのも、それが、土地に根づいた生産を行うための、フレキシビリティのすくない組織だと、流動性を原理とする現在の市場から個人を守ることができない（様々なニーズに対応した多様なサービ

スを提供」できない) ためだ。そこから、先に述べた共同体の「生産」と「消費」の側面についても、ある帰結が訪れる。すなわち、「コミュニティ」は生産とは無関係なものとなるのである。生産は、ほぼ「自然」と同一視される市場の領域の問題である。むしろコミュニティは消費と深く関係のある領域になる。というよりむしろ、コミュニティそのものが消費の対象となっているとまで言えるかもしれない。「個人の自由意思で参加したりしなかったりするコミュニティ」というヴィジョンは、まさに消費の風景に似ていないだろうか。そして、個人の選択を金科玉条に掲げる新自由主義と、そのようなコミュニティのあり方の間には、何らかの関係がありそうだ。

また、コミュニティは自律性をもたねばならない。中央が放棄した「中間的なもの」の役割がコミュニティに期待されるのだから、コミュニティはもちろん、それに「参加」する市民も、自律的な市民意識をもつことが重要になってくる。この動きは、前回(双方向的)コミュニケーションについて述べたことに合致している。つまり、ポストフォーディズムで労働者に要求されたのと同じ「自律性」が、コミュニティに求められるということだ。平たく言えば、国家が放棄した「中間的なもの」の役割を、コミュニティの自助努力に求めるということである。

共同体に対するコミュニティが「よいもの」とされるとき「コミュニティ」にはすくなくとも以上のような含意がありそうだ。このような事態に対して、私たちはどう反応すべきだろうか。国家に対して、放棄した役割をとりもどすよう、訴えるべきか。(つまり、福祉国家をもう一度、と叫ぶべきか。) それは単に現実性がなさそうである。福祉国家の基礎となる雇用が

回復することを前提に未来を想像するのは、その現実性を考えればそれほど健全なことではない。なおかつ、単にコミュニティから離脱しようとするのは(それはそれなりのかたちで私たちを「守って」いるのだから)自殺行為である。

重要なのは、ここまで述べたような「よい」コミュニティの観念が、あくまで理想でしかないことだろう。結局のところ、自由と安全=安心とは、純粋なかたちでは両立しないものなのだから(ジグムント・バウマンを参照)。新自由主義はそれらを両立させようとする。だがそれは現在、実現していない。現存のコミュニティではない。それは将来実現されるべき理想である。その意味で、コミュニティはつねに未完のものなのだ。別な言い方をすると、現在の私たちが、コミュニティに参加し市民になる(もしくはそうできずに排除される)プロセスそのものは、いまだ完了してはいない。それは係争中であり未解決のものであり、交渉の余地があるものだ。そうであるからこそ、コミュニティはキーワードなのであり、そこに加えられてきた限定を、今一度ときほぐす必要がある言葉なのである。それは、よくも悪くも必要=必然として私たちにつきつけられた課題だ。

〈参考文献〉

- レイモンド・ウィリアムズ『田舎と都会』、山本和平・増田秀男・小川雅魚訳(晶文社、1985年)
——『完訳 キーワード辞典』、椎名美智・武田ちあき・越智博美・松井優子訳(平凡社、2002年)
フェルディナント・テンニエス『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト——純粋社会学の基本概念』、杉之原寿一訳(岩波書

店、1957年)

石塚正英・柴田隆行監修『哲学・思想翻訳語事典』(論創社、
2003年)

大塚久雄『共同体の基礎理論』(1955年)(岩波書店、2000年)

新しいコミュニティのあり方に関する研究会「新しいコミュニティのあり方に関する研究会報告書」(2009年8月28日)

http://www.soumu.go.jp/main_content/000037075.pdf

ジグムント・バウマン『コミュニティ——安全と自由の戦場』、
奥井智之訳(筑摩書房、2008年)

(河野: 一橋大学講師/大貫: 関西学院大学准教授)